

北部九州の炭鉱史料群を前にして

宮地, 英敏
九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/11873>

出版情報 : PS JOURNAL. 13, 2008-08-10. PS journal 刊行委員会
バージョン :
権利関係 :

北部九州の炭鉱史料群を前にして

宮地英敏 (九州大学附属図書館付設記録資料館 准教授/
日本経済史)

筆者は平成18年4月に九州大学へ赴任してきた。福岡での研究生生活は、調査対象となる史料の関係から次第に変化をみせ始めている。筆者が所属する九州大学附属図書館付設記録資料館産業資料部門(通常は単に「記録資料館」と呼んでいる)は、平成17年4月に石炭研究資料センター(通称は石炭研)が組織替え(近世史料を豊富に所蔵する九州文化史研究所と合併して設立された。このため北部九州地域の史料を大量に所蔵・公開している)なのであるが、九州地域の史料の量と比べて研究者(教員・大学院生)の数が相対的に少なく、多くの貴重な資料が使われないまま残っている。経済史・経営史を研究する立場からいうならば、宝の山が眠っている場所である。

貧乏性な性格の所以か、この貴重な資料が使われずに放置しておかれることが残念でならず、様々な場面で記録資料館の資料を紹介するのに加えて、自分でも調査対象に加えようともがいていところである。筆者は学部・大学院時代より陶磁器業を主な対象として、瀬戸焼や美濃焼といった中小・小零細企業を中心に考察してきた。そのために、福岡へ赴任したならば有田などをまわってなどと考えてもいたのであるが、有田にあまり近代の史料が残っていない(まだ発見できていないだけなのかも知れないが)のと、目の前の史料の山という環境から、少々状況が変わったのである。

もともとの組織が石炭研究資料センターであったことから推察されるように、記録資料館の主たる史料群は近代日本のエネルギーを支えた、筑豊・三池・高島などの炭鉱史料である。三井や三菱の系列に繋がる炭鉱の経営史料は、それぞれ三井文庫や三菱史料館に所蔵されている。これに対して、行き場をなくした労働組合関係の史料が舞い込んでいることが特徴の1つである。三井三池炭鉱、高島炭鉱、端島炭鉱、日炭高松炭鉱などの労働組合史料は、1950年代、1960年代の労働運動や労働環境に関する研究を深化させるために不可欠な史料群となっていくであろう。

またもう一つの特徴は、柞島炭鉱、北松強粘、高取合資、中興鉱業、麻生商店、明治鉱業、小林鉱業などの北部九州の地元資本の炭鉱経営史料が所蔵されていることである。日本資本主義との関係では脇役として研究も後回しにされていたプレーヤーたちが、いつ自分たちが研究の対象として表舞台に出られるのかと待っているような状態である。これも戦後の復興期から高度経済成長期の史料が大半であるが、戦前の史料類もそれなりに揃っている。

このように、秀村蓮三、東定宣昌、狹野喜弘といった先人たちが中心となって蒐集した史料たちであるが、整理済・未整理と何百箱、何千箱と混在しているため、なかなか全体像が見えにくい史料群も多い。これも貴重な史料でありながらも、利用されずに秘蔵された状態になっている一因である。

さて、これらの膨大な資料を前にした時、宝の山である

とはいっても自分に何が研究できるのであろうかというのは、非常に判断に苦しむところである。不用意に手を付けてしまうと、膨大な資料の海に溺れかねない危険性がある。そのくらい手付かずの史料の量が多い。

また陶磁器業や「在来産業」論との兼ね合いで研究を進めてきた筆者にとって、炭鉱の世界というのは少々勘が働かない分野でもある。岐阜で生まれて名古屋の中高に通い、東京の大学・大学院で学んだ身としては、炭鉱世界自体がはるか遠くの皮膚感覚を持たない世界の話である。門前の小僧で習わぬ経が読めれば良いのであるが、2年ではまだその境地には至っていない。そこで炭鉱関係の書籍などを、暇を見つけて読みふけりながら勘を磨いている最中である。

その短い2年間の知見で受けた印象として2点あげるならば、1つ目は炭鉱労働および炭鉱研究に携わってきた人々の、プラスの評価であれマイナスの評価であれ、労働争議や労働運動への過度の思い入れがある。炭鉱という独特の労働環境に基づき、争議史や運動史を語る上で炭鉱が重要であったことは論を俟たない。しかし経済史・経営史研究という視点から見れば、あまりにもそれ以外の研究がなされなさ過ぎているのである。紡績、織物、製糸、鉄鋼、機械、どの産業でもいいが、炭鉱業ほど争議史や運動史を中心とした労働史に研究が偏っている分野もあるまい。

2つ目は財閥研究やカルテル研究の一環としての炭鉱業研究である。日本の財閥が炭鉱業や鉱山業を重要な資本蓄積の手段としたことは周知の事実であり、それに伴ってこの視角からの研究も積み重ねられている。しかしこの視点からのアプローチでは、北部九州に数多点在していた中小炭鉱の存在が抜け落ちてしまいがちになる。カルテルにおけるアウトサイダーとしては登場するが、彼らが存在する基盤などは外的にしか説明できない。

などとツラツラと考えているうちに、北部九州の中小炭鉱に対する興味関心が沸き起こりつつある。史料の絶対量からいえば労働関係の史料が多いので、今後そちらへと関心が変わって行くかも知れないが、現状では中小炭鉱の存立基盤というものを明らかにできればと思っている。今は筑豊の中小炭鉱経営者の人的資源に関して分析中であり、なんとか今年度中にでも形にできればと考えているところである。

しかしどう頑張ろうとも、筆者が死ぬまでには処理しきれないであろう大量の史料が、記録資料館にはまだまだ広大なスペースを占拠しながら大量に眠っている。今記録資料館に来訪している研究者が総力を上げて、なかなか分析が終わるような分量ではない。関東や関西あたりで史料が無いから研究が行き詰っているなどという大学院生の話や、馬鹿馬鹿しくなるくらいに史料がある。貴重な史料がこのまま眠り続けるのは非常に勿体無いので、興味関心がある方は、教員・大学院生・学部生問わず、どしどし参入して貰いたいところである。